
鴨居は低くて結構だ！

あびす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鴨居は低くて結構だ！

【Nコード】

N7366Q

【作者名】

あびす

【あらすじ】

美少女が突然駆け込んできてそのまま居候。世の男子諸君が憧れるイベントであるが、彼に起こったのはガンダムに対するガンガルのような、極めて微妙なイベントだった。変な幼女とのドタバタコメディ。特に意味のない話。ストーリー性も特にはないです。

下品だったりパロディあったり。暇潰しやトイレのお供にでもどうぞ。

#1・うましかもの

突然美少女が駆け込んできて、そのまま居候。男子諸君の誰もが憧れてやまないイベントである。

しかし、現実是非常。そんなことが起こるのはアニメや漫画、ライトノベルの世界ぐらいだ。一方で誰もがそう割り切って生活している。

この少年もそんな一人だ。浮倉工業高校（うきぐらこうぎょうこうこう）、材料科の二年生、大内義成（おおいよしなり）。高校に入ってから、高校から徒歩10分という好位置にあるアパートに下宿をしている。周囲は大家を含め年頃の女性ばかり、これがラブコメなら恋愛フラグの一つや二つ立ちそうなものだが、一年経つても何も起きやしない。彼女たちとは友人関係ではあるが、それ以上は期待できそうにない。

所詮物語は物語である。ようやくそう悟り始めた今日この頃だ。季節は春。春は出会いの季節だが、工業高校、それも機械系にいる義成に起きることはまずないイベントである。男だらけの教室は気楽でいいが、このまま高校生活が終わりそうで切なくなる義成だった。

そんなある日、義成は家路を辿っていた。進級早々の課題残業で、周囲はすでに陽が落ちている。製図ぐらい真面目にやればよかった。そして残業中もふざけてないでさっさと終わらせればよかった。いくらそんなことを考えても、後の祭り。

ふと、電柱の傍に人影があった。この周囲は家と田んぼしかない閑散とした住宅地である。不思議に思った義成は、電柱の傍に近づいてみる。

「……はうあ！」

思わず叫び声が上がった。

面食らったのも無理はない。電柱の傍の人影は、少女、いや、幼女だったからだ。そして彼女は電柱の傍に倒れている。

すわ重大事件か。義成は慌てて周囲を見渡すが、周囲には病院もなければ交番もない。周囲にあるのは河合荘^{かわいそう}だけ。

そう、義成が住んでいるアパートである。

とりあえず介抱しなければ。義成は少女を抱えてアパートの敷地に入る。義成の部屋は二階にあるが、それよりも敷地内に入つてすぐにある大家の部屋のほうが近い。幸い部屋の電気は点いている。

「白鳥^{しらとり}さん！！ 大変だー！ーッ！！」

そんなことを言いながらチャイムを連打する。しばらくしてから扉が開いた。

「うるさいなあ。何が大変なんだ。とうとうポリス沙汰かい？」

中から出てきたのは眼鏡をかけた女性。長身であり、大き目のTシャツにハーフパンツのみというラフな服装だ。河合荘の大家である白鳥^{しらとり}遼^{りょう}である。義成とは法事でしか会わないような遠い親戚である。

「んな訳ねーだろ！ これ見ろ、これ！」

義成は抱えている幼女を大慌てで指差す。それを見た遼はあからさまに顔をしかめた。

「うわ、誘拐とか……。さすがのあたしもそれは引くわ……」

「んな訳ねーだろ！！ そこに倒れてたんだって！！」

「つてことは襲つたの？」

「んな訳ねーだろ！！！！ どれだけ信用ないんだよ！！！！」

ネタだつてことはわかるが、だんだん苛立つてきた。本気で慌てている義成の様子に、遼の顔つきは真剣になつた。どうやら本気になつたようだ。

「冗談はさておき、とりあえずは様子見よつか。部屋ん中に寝かせてくれる？」

「ほいきた！」

義成は部屋に上がる。中は女性の、それもアパートの大家の部屋とは思えないくらい散らかっていた。ズボラな性格である。

とりあえず空いているスペースに幼女を寝かせる。明るい場所で

見て見れば、彼女はなかなかの美少女である。しかも金髪ツインテール。これで吊り目なら完璧に義成のストライクゾーンだ。

これはフラグの一本でも立つかもしれない。そっち方面の趣味がある義成は淡い期待を抱く。

「可愛い子じゃん。ギセイちゃん、期待してるでしょ」

「してないと言えは嘘になるな！」

そして、義成の趣味はバレている。先程のやり取りも、義成の趣味を受けてのものだ。なお、ギセイとは義成のあだ名だ。音読みしただけであるが、中学生の頃から使われ始め、今では完全に定着している。

「怪我とかはしてなさそうだけど……」

少女の衣服に乱れはなく、出血もない。それで倒れていたのなら、何か病気でもこじらせたか。遼はとりあえず濡らしたタオルを少女の額に置いた。

「う……ん……」

濡れタオルの感触で、少女は目を覚ました。ゆっくりと上体を起こして、周囲をきよきよと見渡している。顔色は悪くない。

「お、目エ覚ましたね」

「気分はどうだ？ 大丈夫かー？」

少女が目を覚ましたことで、義成と遼は安堵のため息を漏らす。とりあえず警察沙汰は避けられそうだ。

ちなみに吊り目である。金髪吊り目にツインテール。義成は心の中でガッツポーズを取った。

「……ここは？」

「あたしん家。ついでにあたしは白鳥遼、コイツが大内義成。あんたを運んだ奴」

「細かいことはわかんないが、いやーよかった。最初は何事かと思っただけだな」

「そーですか。ありがとうございます。いやはや、あなた達は命の恩人です。神様です。正義超人です」

「正義超人って、古いネタ知ってるわねえ」

幼女が深々と頭を下げた。すると、腹の音が鳴る。音の出所は幼女の腹だ。義成と遼は思わず吹きだした。

「何、お腹空いてるの？」

「まさか、腹が減ってたから倒れたとか」

義成は冗談のつもりで言ったのだが、幼女が頭を下げた。どうやら図星のようだ。義成と遼は顔を見合わせる。

「……全く、人騒がせな子だね。しゃーない、何か作ってやるわ。連絡先はその後ね」

「いやー、すみませんすみません」

遼が台所に消えた。幼女と二人つきり。その状況に思わず胸が熱くなる義成である。

「おおうちよしなりさん、ですか。どうもありがとうございます」

「おー。ちなみに大内は大きいに内外の内、義成は正義の義に成功の成な。あんたは？」

「花房乱子はなむらこです。花は咲いてる花、房は乳房の房……」

何気ない自己紹介かと思ったら、とんでもない単語が聞こえた。

義成は思わず吹きだす。

「ちょ、仮にもちっちゃい子が乳房とか言っなよ!? せめておっぱい……」

「それじゃ漢字わかんないでしょーが。それにエロい幼女って需要ないですか？」

「うん、あんまりないな」

「ちょっと、いや、かなり変わった子だ。いくら可愛くてもこれでは萌えない。」

「乱子は乱れる子って書きます。いやらしいでしょう」

「まあ確かにいやらしいな。乱子ちゃんの知識の乱れは子供とは思えず、嘆かわしいが」

「おお、うまい」

乱子が拍手した。義成としては適当に言ったことが褒められて、

なんだか恥ずかしい。

「いや、ちよつと優しすぎだろ!？」

「だって大内さんは命の恩人ですよ。神様ですよ。正義超人ですよ」
「いちいち長えよ! 命の恩人だけで事足りるだろ!」

「じゃあ悪魔超人? 不良がいい事すると凄くいい奴に見えるって
いう。いわゆる一種のツンデレ。殴り合い友情なう」

「俺の言葉は心に届かなかつたかなあ!？」

「はいそこ、漫才切り上げる」

二人の会話を遮るかのように、遼がカップラーメンを持ってきた。
それを見た乱子はあからさまに落胆の色を浮かべる。

「……何か作るって言ってませんでした?」

「作つたわよ。お湯沸かして、ラーメンにスープとかやく入れて、
お湯注いだ」

「それは料理って言いませんよ!？」

「いや料理だろ」

なんだか粗末な扱いに激昂する乱子だったが、そこに男子高校生
である義成の援護射撃。

「ねー」

「なー」

「くっ、このズボラどもめ……ずるずる」

「結局食ってるじゃねーか」

しばらくして、乱子はカップラーメンを食べ終えた。容器の上に
割箸を並べて、手を合わせる。

「じゅっあんでした」

「それで、親御さんの連絡先は? きつと心配してるよ」

最初の目的を果たすときがきた。遼が電話に向かい、受話器を上
げる。しかし、乱子は頭を下げた。

そして、重苦しく口を開く。先程までの調子とは明らかに違う、
深く沈んだ声。

「……私、帰る場所なんかないんです」

「「!?!?」」

義成と遼は思わず顔を見合わせた。声の調子は、ただの家出とは思えない。どう考えても警察沙汰になりそうな雰囲気である。

「私、両親から毎日のように暴力を振るわれてて……。お腹が空いてたのも、そのせいなんです。食事もろくに与えてくれなくて、お母さんからは暴力を振るわれ、お父さんからは性的な意味で暴力を振るわれ……」

乱子の声は震えていて、聞こえてくるのはあまり聞きたくない言葉の羅列。

「……白鳥さん、これ、ヤバいんじゃない？」

「だな。児童相談所か、それとも110番か……」

目的変更。遼は受話器を置いて、電話帳を開いた。探すのは一番近くにある児童相談所。一方で義成も、携帯で児童相談所の検索を始めた。

その二人の様子を見た乱子は慌てて顔を上げる。

「なんて設定はどうですか？」

「「は?」」

二人の手が止まった。

「そんなことになってるわけがないじゃないですか!。やだなもう、ウソをウソと見抜けないと!」

「「殺す!!」」

乱子のふざけた口調で、二人は怒りに打ち震える。二人が拳を固く握り締めて乱子に詰め寄ったことで、乱子は恐れをなして後ずさった。

「お、落ち着きましよう……?」

考えてみれば、大人二人で子供を殴りでもしたら、それこそ警察沙汰だ。二人は怒りを鎮めるかのように深呼吸をして、乱子の前に座った。それにしても面倒な娘である。

「で、本当の連絡先は?」

「それですけど、私、実はこういう者です」

乱子はおもむろに自分の髪の毛を掴むと、そのまま上に引つ張った。

「はうあ！！！」

二人が面食らったのも無理はない。

乱子の首が外れたからだ。義成は自分の目を疑った。遼も両目を擦っている。

「私はいわゆる『デュラハン』なんですよー」

オーケー。これは夢だ。デュラハンなんて、RPGの敵やホラー映画でしか見たことない。それもみんな男の騎士だ。幼女のデュラハンなんか聞いたことがない。

なんて思うものの、目の前には幼女のデュラハンがいるのである。懐をつねってみると、普通に痛い。ということは夢じゃない。

「この花房乱子、一命を救われた恩義は忘れません。恩返しさせていただきます！」

「いやちよつと待て！！ 家はないのかよ、帰る家は！！」

「それがですね、予備の体を置いてたら追い出されちゃいました。失礼な話ですよ。まるで人を猟奇的殺人者みたい」

「いや、首のない体が部屋の中にあつたら、誰でも猟奇的事件と思うでしょ。っていうかポリス沙汰になつてないのが不思議なぐらいだよ」

慌てている義成とは違い、遼は落ち着いている。人生経験の差か、はたまた驚きという感情まで大雑把なのか。

「まあとにかく！ 恩返しをしないと気がすみません！ いや、させてください！ いいですよ、性的な意味でも！」

「性的な意味でって、誰が首無し幼女に欲情するか！ 上級者向けすぎるだろ！！」

「まあ、してる最中に首が取れたりしたら目も当てられないなあ……」

なんだか普通に会話しているが、よくよく考えてみれば乱子の首は彼女の胸元にある。生首が喋っているのだ。正直、大声を出さな

いとやってられない。

「……ギセイちゃんロリコンだから、恩返ししてもらいなよ」

「はあ！？ 勝手に決めるなよ！！」

「やった、義成さんならいいですよ、私！」

乱子が義成に抱きついてくる。相手が普通の幼女なら胸が熱くなるが、生憎首の無い幼女である。おぞましくなりこそすれ、ときめきはしない。

「離れんか、オゾ（まし）いッ！」

「いいんですよ、氏賀 太の漫画みたいなコトしても」

乱子の体は義成に抱きついていて、首はその辺の床に転がっている。そして声は首から聞こえてくる。軽く混乱してきた。

「何の話だよ！？」

「……いや、アレはやっちゃダメだろ……」

「とにかく離れろっ！！」

義成は乱子を無理矢理引き剥がし、彼女の首を体に載せる。

「よし、この状態でさっきのをもう一回」

「義成さんがお望みとあらば」

今度は首のある状態で乱子が抱きついてきた。首さえ乗ってれば、乱子は普通に可愛い。義成は思わず胸が熱くなった。

喜んでゐる義成を見て気を良くしたのか、乱子は義成の胸に顔をすりすりとしすりつける。

神様ありがとう。お母さん産んでくれてありがとう。俺は今この瞬間のために生きてきたんだ。

義成は心の中で全力でガッツポーズを取った。

「……うわぁ、首の有る無しであんなに態度変わるとか、さすがに引くわぁ……」

なんだか遼が引いているが、そんなこと関係ない。喜ぶときに喜ぶまでだ。

「あっ」

その喜びもつかの間、乱子の首がもげた。

「はうあー!!」

「あはははっ!!! ざまあ!!!」

驚き、そして落胆する義成と、その様子で爆笑する遼。遼の中では首もげがコントのオチみたいになってきているのだろうか。

「いいんですよ、コミック」に載ってる漫画みたいなコトしても「この状態でやれるか、馬鹿生首!!!」

義成は乱子が無理矢理引き剥がし、彼女の首を頭に載せる。

「よし、この状態ならできる!」

「この話をR18にするつもりか、馬鹿」

遼が義成の頭をはたく。遼の突っ込みで、義成はなんとか正気に戻った。

「しかし、そこまで恩返ししたがるってことは、何か裏があると見た」

「ぎくっ」

「さっき追い出された、とか言ってたねえ。それで行き場がなくなつたから無理矢理住み込もうと……」

「いいんですよ、児童ポルノ法に抵触するようなコトしても!!!」

遼の言葉を遮るかのように、乱子は無理矢理大声をあげた。この反応、凶星なんだろう。人騒がせな娘である。

「まあ気の毒だし、ギセイちゃんのところには住み込んでいいよ。面白いし」

「はい!?!」

「やった!!!」

突然の展開に驚く義成をよそに、乱子は大喜びして義成に抱きつく。胸が熱くなる義成だったが、乱子の首がまたももげたことで正気に戻った。

「いや待て!!! なんか俺の知らないところで話を進めるな!!!」

「大家権限。封建社会よ、ここは」

「なら俺は革命を起こすぞ!!! 民主主義をくれ!!! 暖かいパンとスープをくれ!!!」

「いいじゃないですか。私、相手は選びますよ。義成さんなら『アリ』です」

「俺は『ナシ』だよ!!」

こんな面倒な娘を住ませてたら、何が起こるかわかったもんじやない。義成の強い口調で、乱子は俯いた。

「……そう、ですよ。私みたいな面白生首、誰だって『ナシ』ですよ。ね……」

自分で面白とか言うな。そう突っ込もうと思ったが、乱子の沈んだ声は、その突っ込みを封じるのに十分だった。

「……ごめんなさい。ご迷惑、おかけして」

乱子は立ち上がると、深々とお辞儀をした。目尻には涙が見える。「でも、久しぶりに他人とお話して、とっても楽しかったです。ありがとう……ごさいました。ラーメン、おいしかったです」

そのまま出口へ向かっていく。

迷惑は去ってくれた。だが、義成の心には何かモヤモヤしたものが残っていた。それは親切心ゆえか、ロリコンとしての下心か、それとも義成自身も知りえぬ感情か。

気付いたら、玄関で靴を履いている乱子の腕を掴んでいた。

「……待てよ」

「……義成さん？」

「俺は『ナシ』とは言ったけど、『ダメ』とは言ってねえよ」

「……え？」

「恩返ししないと気が済まないんだろ？ いいんだよ、鶴の恩返しみたいなことしても」

「それ、途中で出て行かなきゃいけないじゃないですか」

「うっせえ、細けえこたあいいんだよ!!」

なんだか恥ずかしくなつたから、乱子の頭をはたく。頭が取れた。「わっ!？」

「悪かった、ほら。」

それをキャッチし、乱子の体に載せてやる。乱子は少々ぼーっと

した表情を浮かべていた。

「……わかりましたっ！！ ぜひと恩返しさせていただきますっ！！」

乱子が義成の手を握る。なんだか気恥ずかしくなって、思わず頭をかく義成だった。

「はいはい、話がまとまったところで撤回！。事情が事情だから、その子のぶんの家賃はいららないから」

「そりゃ助かる」

「義成さん、話がまとまったところで、ちょっと名前を書いていただけます？」

「ん？ これにか？」

「はいですよ」

乱子がおもむろに紙とペンを取り出したので、義成は深く考えず、それにサインをする。

「これでいいのか？」

「……書きましたね？」

乱子が意地悪く笑った。そう、とてもとても黒い笑みを。

「これで契約書にサインは済みました。以降、大内義成は私、花房乱子を自宅に住ませること！」

「はあ！？」

「うっわ、どこぞの外人部隊かよ」

乱子が紙を広げると、そこには契約書があった。何があるうと、花房乱子を追い出さないこと。要約するとそんなことが書かれている。

「計画通り……」

「おい待て、さっきの涙は芝居かよ！？」

「気をつけよう。甘い言葉と、おいしい仕事」

「待て、ブンナグルス！」

そんなことを言いながら、乱子は遠の部屋を飛び出した。義成は急いで靴を履いて乱子を追う。騙された怒りが渦巻いている。今な

ら体重の乗ったパンチが打てる。

乱子は義成の部屋の前にいた。

「さつきは騙してすみませんでした、ヨシナレス」

「すみませんでしたと済むかよ。あとギリシャ風に言うな」

一発ぐらい殴ってやるうかと思っていたが、美少女である乱子の姿を見ると、殴る気が失せてしまった。ロリコンである以上、幼女を殴ることはできない。

「でも、さつきの言葉にも、ホントのことは混じってますよ」

「とりあえず聞いてやる」

「義成さんなら『アリ』ってトコですよ」

乱子が意地悪っぽくウインクを浮かべた。その仕草に、思わずドキッとした義成である。

いや待て。ドキッてなんだ。デュラハンだから、面白生首だから、相手。

セルフ突っ込みを済ませると、義成は部屋の鍵を開ける。

「まあ……契約は契約だもんな。仕方ない、入れよ」

「えへへ、じゃ、よろしくお願いしますっ」

突然美少女が駆け込んできて、そのまま居候。男子諸君の誰もが憧れてやまないイベントである。

望んでいた形とは少し異なるが、義成は憧れのイベントを起こすことができた。

これが一連の騒動の始まりだとは、このときは思いもよらずに。

#1・うましかもの(後書き)

読んでいただき、ありがとうございます。

久々の新作です。っていうかこんなの書いてる暇あったら別の話書けよって話ですが。

これは気が向いたら更新します。

基本馬鹿話なので、あまり期待はしないでいただきたいと思いますw

#2・愛妻家の朝食

オニイチャンアサダヨオキテ。

世のロリコンの眠りを覚ます呪文である。無論、幼女以外に使える者はいない。

そして、ここにも一人、その呪文を使いこなす者がいた。

「お兄ちゃん朝だよ！ ほら、さっさと起きて！ 遅刻しちゃうよ！」

幼女の声が聞こえた。まさかと思いつつ、義成はゆっくりと目を開ける。そこには、布団の上にちよこんと置かれた幼女の生首があった。

そう、昨日居候させる羽目になった、デュラハンの花房乱子。彼女の首だ。

「はうあー!!!」

一気に目が覚める。得意げな表情の乱子になんだか腹立たしい。

「ふっふっふ、どうですか。これぞ花房式目覚まし。この可愛い声で起きられるなんて、幸せ者ですね」

時計を見ると午前7時15分。学校は8時40分からであり、学校までも歩いて10分の距離なので、普段は8時前に起きているというのに。とりあえず罰を与えるべく、乱子の首を持ち上げる。

「はや？ 一体どういう心境ですか？ さてはご褒美のちゅー！？ いやん、まだ心の準備というものがっ」

なんだか変なテンションの乱子は無視しつつ、ベッドの側にある箆笥のてっぺんに乱子の首を置く。箆笥の高さは義成の身長よりやや高く、乱子の体では到底届かない高さだ。

「え！？ ちよ、ま、おーろーしーてーくーだーさーいー!!!」

「俺の眠りを妨げた罰だ!!! 寝起きにあんなオゾいもん見せやがっつて!!!」

「オゾいとはなんですか、乱子ちゃんのプリチーフフェイスですよ！
欲情の一つぐらいしてください！！」

「やかましい、自分でプリチーとか言うな！ しばらくそこで頭冷
やしとけ！！」

二度寝には微妙な時間。それに目が冴えてしまったので、とりあ
えずテーブルに向かう。テーブルの側には乱子の体。猟奇的事件を
予感させる光景に思わずため息をつく。

ちなみにこのアパートは1Kに風呂とトイレ付き。まあそこそこ
の物件である。

テーブルの上には、暖かい湯気を立てている白飯と味噌汁、それ
と玉子焼きがそれぞれ二膳ずつあった。ひよっとして乱子作った
のか。

「おい面白生首」

「なんですか？ というか面白生首と認めてくれたんですね？」

「いや、認めてはないぞ」

「はいはいツンデレツンデレ」

「やかましい。朝飯作ったのか？」

「はいですよ」

久々のまともな朝食である。ここ最近の朝食といえば、食べない
か食パン1枚とか、そんな貧相なものだ。久々に見る普通の朝食は、
なんだかとても美味しそうに見えた。

「たまには役に立つことするじゃねーか」

「任せてくださいよ、生首幼女メイドにもなれますよ！」

「生首はいらん」

幼女メイドという言葉にはときめかざるを得ないが、生首という
単語一つで台無しだ。

「おい、そんなところにいないで下りてこいよ。飯にするぞ」

「自分で上げておいて!？」

乱子がどんな動きをするのか見物すべく、あえて首を下ろしには
行かない。すると、突然体が動き出し、ベッドによじ登って、箆筒

の上にある乱子の首を取った。

「……オゾい光景だな。っていうか遠隔操作できるんだな」

「はいですよ。視界はこの目が見てる範囲だけになりますけど」

結構便利に思えてきた。

乱子が義成の向かいに座る。どこからか割箸を探してきていた。

「んじゃま、いただきます」

とりあえず、玉子焼きを食べてみる。中に海苔が巻いてあって、少し辛めだが、なかなかの味だ。

「……うん、意外とうまいじゃねーか」

「でしょう。花房式玉子焼きですよ。どのへんが花房式かは内緒ですけど！」

味噌汁をすすってみると、こちらもなかなかの味。具は若布と玉葱で、どこか懐かしさを感じさせる味だった。

「……うーん」

「どうしました？」

「いや、なんでか知らないけど、食ったことのある味だなーって」

「おお、お袋の味を完全再現ですか」

「いや、残念ながら、まだ及ばねーな」

義成の母親はなかなかの料理上手である。中学校の頃は弁当が美味くて助かったものだ。

「……なるほど。では義成さんのお母様よりも料理が上手くなれば、結婚ということですね」

「ねーよ。っていうかお前さんは結婚できる歳なのか？」

「……ワタシハエイエンノジュウニサイ」

「棒読みじゃねーか。……まあ、首取れてりゃそうそう歳は取らないな」

「便利な体ですよ。義成さんもひとつどうですか？」

「なるかー!!」

いつまでもこんなやりとりをしていたら、朝食が冷めてしまう。

それは料理に失礼だ。とりあえず食事に集中しよう。

そんな義成の姿を見てか、乱子も食事を始めた。

「んじゃま、行ってくるわ」

義成は制服のブレザーに着替えて、玄関で靴を履く。高校指定のものは制服だけで、靴と鞆は自由。というわけで、靴はスニーカー、鞆はトートバッグ。教科書は全部学校に置いてあるし、昼食は学食にしているので、学校に持っていくのは筆箱だけだ。おかげさまで学校のロッカーは教科書に体操服に作業着にと手狭である。

「はいはい。遅くなるようでしたら電話してくださいね？」

「いや、電話ねーし」

義成の連絡手段は携帯電話のみ。その携帯電話も学校に持って行っている、部屋への連絡手段は全く無い。大家の遽に伝言を頼むという手もあるが、彼女はズボラなので忘れられる可能性が高い。なお、学校は携帯禁止である。持って行っても常時マナーモードだし、時計代わりにしか使わないのだが。

靴を履いて外に出ると、隣の住人と出会った。

「あ、ギセイ君おはよ」

「ども。花さん、今日は早いつすね」

隣の住人である風間花^{かざま はな}。隣の市にある大学に通う大学二年生。小柄かつショートカットで、どこか小動物のような印象を受ける。

「いやー、ちょっと約束があつてねえー。ところでギセイ君、なんだか女の子の声がしたんだけど……」

「ぎくつ！ー！！」

まずいところを聞かれた。乱子は首さえ取らなければ普通の幼女に見えるのだ。警察沙汰になってもおかしくない。

「ひよつとして、コレ？」

花はにやりと笑うと、小指を立ててくる。

「違います、違います」

ああ、これが冤罪なんだな。何が悲しくてあんな面白生首と付き合わねばならんだ。

義成は心の中でそう呟いた。

「まあ、ほどほどにねー。んじゃ、電車来るから、またねー」

「はい……」

なんだか誤解したまま、花は駅方面に走っていった。中高と陸上部だったらしく、足は速い。

「朝っぱらから疲れちまったな……」

こんな賑やかな朝は久しぶりだ。学校までの道が非常に気だるく感じられる。

歩くにつれ、同じ制服を着た人間が多くなってきた。工業高校という性質か、見かけるのは男子ばかりだが。

横断歩道で信号待ちをしていると、隣に自転車が停まった。見たことのある自転車である。

「よおーギセイさん」

「おお、一さん。おはようさん」

同級生の三好一存みよし かすなが。小学校からの腐れ縁。柔道部に所属しているうえに筋トレが趣味というだけあってか、がっちりとした肉体の好漢である。

そんな一存に隠れるかのように、自転車の荷台から少女が降りた。見たところ小学校高学年ぐらい。一存とは似ても似つかぬ美少女である。

「……！？ おい一さん、後ろの子は！？」

「ああ、近所に住んでる弾ちゃんだ。毎朝ここまで送ってんだよ。」

ギセイさんとは朝会わねーからなあ」

確かにこのあたりの校区である畑丸小学校は横断歩道を渡って右、浮倉工業は左に進む。しかし、毎朝近所の少女と二人乗りで通学とは、なんとも羨ましい話だ。

「松永弾まつなが はづむです。いつも一兄かずにいがお世話になってます」

弾がぺこりと頭を下げた。少々小悪魔な雰囲気があるが、なんとも可愛らしい少女である。実に羨ましい。

そうこうしてるうちに信号が青になり、横断歩道を渡った。一存

は自転車から降りている。

「それじゃ一兄、またねー！」

「おう」

横断歩道を渡り終えると、弾はこちらに手を振って、小学校のほうに駆けていった。彼女の姿が小さくなるや否や、義成は一存に迫る。

「紹介しろ！！！」

「しねーよっ」

一存はからからと笑う。知人の少女に迫るのは義成の持ちネタのようなものであり、いつも軽く流される。義成としては結構本気なのだが。

「それにしても、なんで毎朝送ってんだ？」

「いや、中学の頃は朝練やってたけど、今は朝練ねーんだわ。そんなこと弾に話したら、じゃあ毎朝送ってよってことになってな。まあいいトレーニングだぜ」

「……………うらやましいッ……………！！」

毎朝少女と一緒に自転車に乗れるなんて羨ましいイベントを筋トレとしか考えていない一存に軽く殺意を覚えつつ、浮倉工業に到着。駐輪場に向かう一存と別れ、義成は上履きのスリッパに履き替えて教室に向かった。このスリッパは何度見ても便所スリッパにしか見えない。学年ごとに色が異なり、青・灰・緑のローテーションだ。義成の世代の色は青であり、余計に便所スリッパっぽい。

「ういーっす」

通常校舎三階にある、材料科二年の教室に入る。鞆を机にかけて今日の教科書を廊下のロッカーから取り出す。別にシャレではない。今日の科目は金属工学（専門科目）・実習Bが2コマ・昼休みを挟んで物理・英語・社会となっている。昼からが地獄だ。間違いない。睡眠との戦いになる。

実習やって食事やっての理系科目は拷問である。

「ギセイ、おはよう」

椅子に座ると、友人が気だるそうに机にもたれてきた。高校からの付き合いである、井上成美^{いのつえなるみ}。坊主頭で痩身の、いかにもスポーツマンといった趣である。実際バレー部に所属しており、技術はかなりのものだ。学力もこの高校では中の上と、スペックはなかなか高い。

「おー、なるちゃん。眠そうじゃねーか」

「いやな、妹がな……」

妹。その言葉に、義成は目を輝かせる。成美の家に遊びに行ったときに一度だけ見たが、兄に似ず可愛らしい少女だった。確か五つ下の小学六年生だそうだ。

「おい、詳しく言え。結果次第では俺はお前を殺さねばならん」

「マジか。……いや、辛木小は今日から修学旅行でN県に行くんだが」

辛木小はここから車で二十分ほどの距離にある。

N県は隣の隣の県であり、ここらの小学校では定番の修学旅行先だ。

「ああ、ウチもN県だったな」

「んでな、にーにーと一緒にじゃなきゃ嫌^やにーっ!!! ……つてずっとぐずつてな。しかも俺の布団で。おかげで寝たの二時回ってたぜ」

成美が遭遇したシチュエーションを想像すると、義成の心にどす黒いものがたまっていった。

「てめえ!!! そんな羨ましいシチュで何もしなかったっていうのかにーっ!!!」

「何もする訳ねーだろーが!!! 相手は妹だぞ!!!」

「妹だからいいんじゃないか!!! しかもなるちゃん、にーにーって呼ばれてんのか!？」

「まーな。いい年だからその呼び方はやめろって言うてんだが」

にーにー。お兄ちゃんとはまた違った、可愛げのある呼び方。

「くそ、てめえ俺と代われ!!! 俺もにーにーって呼ばれたいよ!

！」

「いや、実際呼ばれてみる！？マジでウザいぞ！！」

「にーにー」

後ろから野太い声が聞こえてきたと思ったら、一存が後ろから抱きついてきた。

「うわあああああつ！！オゾい、死ぬっ！！」

「おわ、マジきめえ……。それはないわー……」

「おま、呼ばれたいって言ってたじゃねーかよ」

義成と成美からのブーイングで、一存は義成から離れる。

「俺が呼ばたいのは可愛い少女からであつてな、お前のような筋肉ダルマからは呼ばれたくないわ！！」

「俺も呼ばれたくねーな……。一さんからはお兄ちゃんとも呼ばれたくない」

「ガハハ、俺にできることは筋トレぐらいだからな！！」

一存が豪放に笑うと、チャイムが鳴った。朝の十分間読書の合図である。教室の中で好き放題話していた生徒はざわめきつつも席に戻り、それぞれ本を読み出した。

二時限目が終わり、義成と成美は溶接実習室で一息ついていた。実習は出席番号順に4グループに分かれているため、一存は別のグループだ。

今日の実習は溶接の練習を兼ねた、材料引張試験。二つの鉄板を溶接で繋ぎ合わせ、それを引張試験機にかけて、溶接の強度を測定する、といった内容だ。先週の実習は、試験片に鋼球を当てて、その跳ね返りで硬度を測定するといった退屈な内容だったせいか、今週はなかなか楽しめている。

ましてや担当教師が「一番強かった奴にジューズ一本奢る」と言ったため、余計に熱が入るといふものだ。我ながら単純だと思う。「腹減ったな、ギセイさん」

「おー。学食にチキンカツでも食いに行くか？」

「おう、行くうぜ」

チキンカツは早弁用の人気メニューである。実習なんかで「腹減った」とのたまう奴が多いせいとか、午前中の休み時間に限り提供されている。単品で90円、ご飯付きで150円と手ごろな値段なので、懐にも優しい。

そうと決まれば善は急げ。実習用の安全靴からスリッパに履き替えると、二人は食堂に走った。この高校はやたら広く、各科ごとに三階建ての実習棟が備わっており、材料科の実習棟は敷地の北端にある。急がないと間に合わない。

食堂の前にたどり着いたところで、校内放送が鳴った。

『Z-Zの大内義成君、ご家庭の方がお見えになっています。至急、事務室まで来てください』

Zは材料科の略で、他に建築科はA、土木科はC、デザイン科はD、機械科はK、電気科はEとなっている。

「お、ギセイさんどーした？」

「さあ？　しゃあない、とりあえず行ってくるわ」

「おー。ハタケンには言つとくわ」

「悪い」

今回の実習の担当教師は畑謙はたけん。苗字ではなく、フルネームだ。そのため、生徒からのあだ名はハタケン。そのままである。

ともあれ、家の人が来ている。両親は共働きで、今の時間帯は仕事だろう。となると、思い当たる節は唯一つ。

「あ、義成さん」

予想は的中。来ているのは乱子だった。事務室の前で、なにやら手荷物を振りかざしている。

「何しに来た、面白生首」

「何って、お弁当ですよー。せつかく作ったのに忘れるんですもん」
「弁当？」

乱子の手荷物をよく見てみると、中学生の頃から使っていた、二

階建ての弁当箱だ。高校に入ってから学食ばかりで、ほとんど使うことはなかったというのに。というかどこから引つ張り出してきたのやら。

「弁当つておま、俺はいつも学食だつつに」

「まあまあ、せつかく作つたんです。お金の節約と思って」

「まあ……しゃあないな。ただ、今度から弁当作つたら朝に言えよ。恥ずかしいんだからな、これ」

週に二回しか着ないからと一学期毎にしか洗濯しない、小汚い作業着で事務室の前にいるのは正直恥ずかしい。

「乱子ちゃんも恥ずかしいですよ。部外者が学校に行くのつて恥ずかしいんですよ」

「だからそういう恥ずかしさを覚えないように、ちゃんと弁当作つたつて言えよ。まあ、作つてくれたのは嬉しいけどな」

「おおお、デレ来ましたよデレ」

乱子の茶化すようなテンションが恥ずかしいやら苛立つやら。

「はいはい、用事が済んだらさっさと帰れよ。実習棟遠いんだからな」

「はい。帰ったら感想聞かせてくださいね」

「覚えてりやな」

乱子を追い払つと、弁当を持って教室に向かう。教室には鍵がかかっているのと、とりあえずロッカーに放り込むと、休み時間は残り数分。まずい。教室から実習棟までは3〜4分かかるので、走れば間に合うだろう。帰ったら乱子に文句の一つでも言おう。

そんなことを考えながら、義成は実習棟に走るのだった。

実習終わつて、昼休み。いつもは作業着のまま食堂に向かうのだが、今日は弁当があるので、教室に戻る。作業着の上着を脱いで、ズボンを履き替えると、適当に畳んでロッカーに放り込む。

「ギセイさんが弁当は珍しいね」

席に着くと、後ろの席の友人、織部佐助おりへさすけが声をかけてきた。高校に入ってから付き合いで、ゲームや漫画等をよく貸してくれる。眼鏡をかけた、少々おとなしそうな雰囲気ふんいきの男だ。

「おー。たまたま親が来ててなあ」

考えてみれば、教室で昼食をとるのは何ヶ月ぶりのことだろうか。高校に入りたての頃は学食の仕組みがわからず、購買のパンを教室で食べたりにもしていたが、今では食堂ばかりだ。

いつも一緒に食堂に行っている成美に食後のアイスを買ってきてもらうよう頼んでいるので、彼が帰ってくるまでに食べてしまおう。弁当箱を開ける。

まずは二階のおかず入れ。朝に出た玉子焼きの残りのこりと、鳥の唐揚げに焼きそばだ。玉子焼き以外は冷凍食品に思えたが、よく見ると唐揚げは手作りのようだ。雰囲気からすると、義成が学校に出たから作ったように思える。おそらく急な思い付きだろう。まったく面倒な奴である。

ため息をつきながら、今度は一階のご飯入れを開ける。

「ぶっ!？」

開けた瞬間、義成は思わず吹きだした。白ご飯の上には、海苔で作られたハート。ご丁寧に海苔で「LOVE」とまで描かれている。「ギセイさん、どしたの？」

「い、いや、なんでもない」

怪しまれないように、とりあえずハート部分だけをかきこむ。急にかきこんだせいか、少々むせた。

「げほげほ……。織おりちゃん、お茶ちょうだい……」

「何がっついてんの」

佐助に笑われながら、後ろから水筒を受け取り、麦茶を少し飲む。少し落ち着いてから、とりあえずおかずを食べてみることにした。まずは唐揚げ。まだ温かく、味付けも良い塩梅だ。これで不味かつたら批判のネタになるのだが、どうやら乱子は料理上手らしい。結局は態度しか批判できないため、義成は肩を落とした。

それにしても、本当にどこかで食べたことのある味である。はっきりと思い出せない、ぼんやりとした記憶。

普段の昼食は賑やかな食堂で成美や一存と馬鹿話をしながら食べているのだが、教室では特に喋ることがない。微妙に違和感を覚えつつ、なんとか完食。正直美味かったし、腹も良い具合に膨れた。普段はチャン麺 中華麺にうどんの出汁をかけたもの ばかり食べているから余計にそう感じる。

弁当箱を鞆にしまい、カッターシャツの上にブレザーを羽織っていると、成美と一存が戻ってきた。二人とも作業着姿であり、いつもどおり実習を終えてから直で食堂に行ったようだ。

「お。なるちゃん、トラ吉あつた？」

「おう。ほい」

成美が作業着の上着のポケットから棒アイス差し出す。チョコバナナ味の当たり付きアイスだ。最近60円から80円に値上げされたものの、小学生の頃から変わらぬ味で、好物の一つである。

「センキュー。ほい、100円」

「おう。20円は手間賃な」

「おま、まあいいけどな」

成美に100円玉を手渡し、アイスをかじる。アイスは食堂で食べるという校則があるが、もはや有名無実と化している。まあ教室内で煙草を吸う奴もいるので、アイスぐらいはどろろということはない。

すると、制服に着替えた一存がこちらに近寄ってきた。手には白いラベルのディスクがある。

「織やん、これ良かったわ」

「お。でしょう」

「できることならコピーしようと思ったぐらいだ、ガハハ」

「なんだそれ、映画か？」

成美も着替えてからこちらに来た。

「『紳士の映画』だよ」

紳士の映画。仲間の中で使われている隠語の一つで、青少年にはふさわしくない映像コンテンツのことである。

「マジか！……ちょっと貸してくれねーか？」

佐助が持つてくる「紳士の映画」に外れはない。義成は中身が気になり、机の上に置かれていたディスクを手取る。

「いいよいよ。どうぞ使ってください。ゲヒヒ」

「よっしゃ、センキュー」

これで楽しみが一つできた。義成はディスクを嬉しそうに鞆へと入れるのだった。

「ただいまー」

義成は自宅の扉を開けた。今日は定時である。

扉を開けた瞬間、おぞましい光景が目飛び込んできた。

「はうあー!!!」

「おかえりなさい。ご飯にします？ お風呂にします？ それとも

……私？」

玄関先には乱子の首があったからだ。体は何をしているのかという、テレビの前で体操座りをしている。

「……帰るなりオゾいもんを見せやがって!!!」

「え、ちょ、なんでキックモーションに入ってるんですかー!？」

蹴り飛ばしてやるうかと思っただが、さすがにそれは可哀想だ。とりあえず寸止めで許し、弁当箱を出す。

「お、愛情弁当いかがでしたか？」

「何がLOVEだ!!! 見られたらどうしようかと!!!」

「いいじゃないですか。見せびらかしてやりましょうよ。義成さんが私の首を持って、学校に行ったらいいじゃないですか」

「少年院行きだ、この面白生首!!!」

とりあえず乱子の首を体の近くに持って行ってやる。すると、体

が動き出して、首を拾い上げた。何度見ても慣れない、おぞましい光景である。

「っていうか、どうやって玄関に首置いたんだ？」

「投げ飛ばしました」

「後先考えないな。ホント馬鹿だろお前」

「おバカキャラいいじゃないですか」

「まあ、頭が足りない幼女は可愛いがな。お前はリアルに頭足りてないから」

「おお、うまい」

ちよつと自信があつたので、乱子の言葉がお世辞だろうが、なんだか嬉しい義成であつた。

「まあ、弁当自体は美味かつた」

「あら。ありがとうございます」

「LOVEはいらんがな」

「あれが大事なんですよ！ キモなんですよ！ 白眉ですよ！」

「白眉じゃない！ 杞憂で蛇足だ！！」

自分で言つといて、意味がわからない。料理を褒められた乱子はなんだか嬉しそうだったが、そこに突っ込んだらまた何かいらんことを言われそうなので、心に秘めておくことにした義成だつた。

深夜。

乱子が眠つたのを確認した義成は、そつと布団から抜け出し、テレビにヘッドホンをつないだ。DVD再生機能のあるゲーム機に、昼間佐助から借りたディスクをセットし、再生開始。

わくわくしながら女優の容姿を見てみると、大人っぽく、それでいて巨乳だつた。

美人なことに変わりはないが、ロリコンである義成はがっくりと肩を落とすのだつた。

#2・愛妻家の朝食（後書き）

まさか続きを投稿しちゃうとは。

チャン麺は私の主食でした。

#3・あの娘の彼

六月初頭の金曜日。

義成は実習の合間の休み時間に、成美と佐助とで食堂に来ていた。時刻は十四時五十分。あと一時間で今週も終わり。

だが、最後に待ち受けていたのはとんでもない強敵だった。義成達は缶ジュースを片手に、肩を落としている。外は雨。じめじめした気候が、三人を余計に落ち込ませた。

「……きつついなー」

現役で部活をしており、この中では一番体力があると思われる成美ですらため息をつく。彼はこの後部活も待ち受けているので、余計に気が滅入るのだろう。

今回の実習はアルミの砂型铸造。溶かしたアルミを砂型に流し込み、铸件を作るといったものだ。今回作った物は、一年を通して作りに上げる「電気スタンド」の台座になる。義成達は前回の実習で電気回路を作っており、今回はイライラするのみで体力は消耗しなかった。が、今回は体力を滅茶苦茶消耗している。

「一さんが『楽勝楽勝、ガハハ』なんて笑ってたから、甘く見てたな……」

「考えてみれば、一さん人間じゃないからねえ……」

そう、ひどいのは暑さである。ただでさえ蒸し暑い工場内で、溶けたアルミ、アルミの融点は660℃を使うのだ。まだ六月であるにも関わらず、汗だくである。疲れて渴いた体に、炭酸飲料の甘味と刺激が心地よい。

別に会話もなく、ただグダグダと過ごしていると、チャイムが鳴った。工場は食堂の隣であり、チャイムが鳴ってからでも十分間に合う。

「あー、行くか」

「だねー。あと一時間、頑張ろっか」

「部活行きたかねーなあ……」

三人はぼやきながら空き缶をゴミ箱に放り込むと、とぼとぼと工場に向かうのだった。

「ただいまー」

義成は傘を畳むと、自宅に戻った。実習で汗をかいたうえにこの雨である。体がベタベタしてしょうがない。さっさとシャワーを浴びよう。

「あ、おかえりなさいー」

「やー。お邪魔してるよ」

部屋の中には、乱子と遼がいた。二人で何かボードゲームをやっているようだ。乱子の首と遼が向かい合い、その間には乱子の体がある。

「どうやら二人がやっているのは人生ゲームで、乱子の体は銀行役のようだ。確かに頭からすれば面倒ではないだろうが、結局銀行役をやるのは乱子である。頭はそれに気付いていないらしく、得意気な表情を浮かべている。」

「どうですか。だれもやりたがらない銀行役も、体が別行動できればこの通り。暗い暗いと言う前に、すすんで灯りをつけましょうの精神です」

「はいはい、すごいすごい」

突っ込むのも面倒だ。義成は鞆を置いて、長袖のカッターシャツを脱ぐ。

「きゃっ!! もう、白鳥さんが見てる前で、そんな……。まだ心の準備というものがっ!! でも無理矢理も嫌いじゃないですよ!」
そして乱子の反応は予想通り。

「何オゾいこと考えてんだ、この猥褻生首」

「あゝらあゝらあゝらゝ、ひょっとしてあたしはお邪魔さん?」

「白鳥さんまで何言ってるんだよ。シャワー浴びるだけだ、シャワ

」を」

「「シャワーって、OKサインだよな」」

二人のリアクションがハモっているのがなんだか無性に腹立たしい。とはいえ、疲れきっている体でこの二人に付き合おうとは思っていない。義成は替えの下着と部屋着と用意すると、二人のことは無視して、シャワーを浴びに行くのだった。

シャワーから戻ってきてみると、乱子と遼はまだ人生ゲームに興じていた。なんでまたこの二人で人生ゲームをやっているんだろうか。とりあえず空いた場所に腰掛ける。

「何でまた人生ゲームとかやってんだ？」

「いやー、暇だからさー。かといって遠出もめんどくさいし。たまたま乱子ちゃんが暇そうにしてたからさ」

「見てください、この幸せな家庭を。結婚して、子供は四人。一番上は男の子で、あとは女の子。もちろん妹は全員ブラコンですよ」

「なんだよその詳細なディテール。羨ましいけどな」

「あ、義成さんはお兄ちゃんじゃなくて、私の隣ですよ」

「待て、俺を巻き込むな!!!」

幼女と結婚したいと思ったことはあるが、相手が乱子なら話は別だ。何が悲しくてデュラハン娘と結婚しなくてはならないのだ。

「もう、義成さんが激しいから、子供が四人も……うふふふ」

「いらんこと考えるな、オゾいつ!!!」

「避妊しないからだよ。やればできるのに」

「白鳥さん、下品すぎるわ!!!」

「義成さん相手なら無防備でも……」

「だからやめんか!!!」

下ネタは嫌いではないが、このままだと際限なく下品な方向に話が進みそうなので、乱子の頭をはたく。下ネタ好きな幼女とかありえない。

遼の駒を見てみると、終盤にも近いというのに独り身だった。珍しいこともあるものだ。

「で、白鳥さんは独身なんだな」

「はい、家賃二割増」

「待て待て待てえ！？なんでそうなる！？」

なんとなく感想を述べただけなのに、いきなりの家賃上げ。あまりにも理不尽な事態に、義成は困惑する。

「やだねえ、冗談よ、冗談」

「目が笑ってないんすけど！？」

結婚という単語はNGワードらしい。いつか本気で家賃を上げられそうな気がするので、これからは気をつけよう。

「まあまあ、義成さんもどうですか？」

「そうだな、せっかくだし」

考えてみれば、人生ゲームなど久しぶりだ。こんな機会でもないとやらないだろう。義成は駒を用意すると、ルーレットを回すのだった。

二時間後。

「あ、やば、そろそろ帰って仕事しないとまずいなあ……………」

「仕事あったのかよ！？」

遼はイラストレーターで、アパート管理は副業のようだ。とかさつき「暇だから」なんてのたまっていたような気がする。

「まあ、気分転換には成功。さ、片付け片付け」

「せっかくサッカー選手になったのにな……………」

「あれ、義成さん、サッカー選手が夢だったんですか？」

「小学校の頃はな」

サッカー選手という職業は小学生男子にとっては憧れの職業の一つである。義成は今でこそ特殊な性癖を持ってしまったが、小学生の頃は普通だったのだ。

「今からでも遅くありませんよ！ 私が練習に付き合っただけです！
！そして疲れた義成さんに寄り添うんです！」

「じゃあシユートの練習をするか」

「ちよ、私の首は恋人なんですよ！！ ボールは友達ですから、恋人と友達の違いは大きいです！！」

「あんたら、漫才よりも片付けやりなさいよ」

「はい」

人生ゲームは片付けが一番面倒臭い。散らばったお札を集め、ケースに戻していく。言いだしっぺの遼は何もせず、指示だけ。刃向かいたいが今の力量では返り討ちに遭うのがオチだ。反逆の衝動をぐっところえる。

「よし、おつかれさまー。んじゃね、おやすみー」

「はい、おやすみなさい」

遼は人生ゲームを持って、義成の部屋から出て行った。時計を見るといい時間である。腹も減ってきた。

「あ、もうこんな時間ですか。ご飯作りますね」

「おう」

色々とアレな乱子であるが、こういうときは素直に役立つと思える。料理の腕は良いのだ。

夕食ができるまで横になってテレビを見ていた義成だったが、突然携帯電話が鳴った。

「あ、鳴らないケータイが」

「やかましい」

電話の主を確認すると、成美であった。部活帰りだろうか。とりあえず電話に出る。

「うえーい」

『おお、ギセイさんか。電話よかったか？』

「おー、暇してた。どした？」

『いやな、織やんの『紳士の映画』、次はギセイさんだっただろ』

「そっだよ。今日なるちゃんか忘れるから……。楽しみにしてたん

だぞ」

先日佐助が持って来ていた「紳士の映画」は非常に評判がよく、一存も絶賛していた。借りることになった義成も楽しみにしていたのである。

『悪い、持って来てたわ』

成美は口ではそう言っているが、全然悪びれた様子 wasn't なかった。

おおかた鞆の中に入れっぱなしで忘れていたのだろう。

「おま、何忘れてんだよ」

『いや、悪い悪い。今から持っていくわ』

「今から？ もう遅くねーか？」

『いや、今ギセイさん家の前だし』

「おい」

つい笑いが出た。成美は原付登校なので、この程度の寄り道はなんともないのだろう。

「まあいいわ。待ってる」

『オーケー』

そこで電話は切れた。気付けば乱子がエプロンで手を拭きながら横にいる。

「どうしたんですか？」

「友達が来る。……あ、お前の存在を忘れてたわ」

「ちょっと、嫁たる乱子ちゃんを忘れるとは何事ですか！ いいですよ、見せ付けてやりましょうよ！ 私と義成さんのラブラブっぷりをー！」

「別にラブラブもしてないわ！ いいか、絶対首とかもくなよ！」

「わかってますよー。他人の前で首をもがなとか、常識じゃないですか」

「その常識が通用しないから言っとなるんだ」

そもそも首がもげるということ自体が非常識ということには気付いていない義成だった。慣れというものは恐ろしい。

チャイムが鳴った。成美が来たのだろう。玄関に迎えに行く。

「よう」

「おー、お疲れー」

予想通り、制服姿の成美がいた。学校帰りだからか、カッターシヤツをズボンから出して、ボタンもいくつか開けているラフな格好だ。何も言っていないのに部屋の中に入ってくるあたり、気の置けない間柄である。

「いやー、悪い悪い。ほれ」

「おー、サンキュー」

成美からディスクを受け取る。乱子にばれないよう適当なCDケースに入れておく。いくら色々とアレな乱子とはいえ、異性に卑猥な物件を見られるのは恥ずかしい。

「お話、終わりましたー？」

「はうあー!!」

成美が面食らったのも無理はない。乱子が出てきたからだ。友人の家に見たことのない幼女がいる。驚くなどというのは無理な話だ。

「おい、ギセイさん、なんだこの子」

見られたからには仕方ない。事情を説明しておかないと誤解されてしまう。

「あー、色々と深い事情が……」

「深い情事!? いやん、義成さん、そんな人前で……」

「何が情事だ、このたわけが!」

乱子の頭を思いつきりはたく。

「あ」

力が強すぎたのか、それともわざとか。乱子の首がもげた。

「はうあー!!!」

「……うん。こいつはデュラハンの花房乱子。故あって居候してる」

「いや、驚かせちゃってすみません」

「あぁ、うん。こっちこそ……」

成美は最初こそ驚いていたが、次第に落ち着いてきたようだ。や

けに回復が早い。こんなに冷静な奴だったか。

「……あれ、なるちゃん、あんまり驚いてねーな」

「まあ、最初はビビッたけどな。ぶっちゃけ、ラミアが彼女って友達がいるから……」

「はあ!?!」

ラミアというと、RPGなんかに出てくる、上半身が女性で下半身が蛇というモンスターだ。そんなものが実在するのかと思っただ、目の前にデュラハンがいる。デュラハンがいるのならラミアがいてもおかしくはない。

なるほど、成美がそこまで驚かなかったわけだ。

「ラミアとかマジでないですよ。下半身蛇じゃないですか」

「いや、デュラハンもないぞ。首もげてるじゃねーか」

「だな。そのラミアの子、上半身はすげー美人で、気立てもいいからな。確かにあの子には惚れるわ」

「気立てなら乱子ちゃんも負けてないですよ!」

「いや、気立てがいい子は自分でそんなこと言わない」

とは言ったものの、乱子はなかなかよく動く。義成は何度か「これでデュラハンじゃなけりゃ下ネタも我慢するの……」と思ったことがある。

「まあうん、色々あるから、この件は内緒で頼むわ」

「おう、わかった。この様子だと犯罪の臭いはねえしな」

「信用ないなオイ!?!」

「そりゃ可愛くてちっちゃい女の子だからな」

「首もげてるけどな」

「そうだけど。まあ妹よりは可愛い」

「首もげてるのを『そうだけど』の一言で済ますなるちゃんにびっくりだよ」

「お褒めいただき光栄ですー。あ、せっかくですから、ご飯を食べ歩いてきませんか?」

「お。じゃあ呼ばれてく」

成美の適応力に驚きながらも、義成は居間に成美を通すのだった。

河合荘のすぐそば。

成美を見送る義成と乱子の姿を遠くから見ている少女がいた。赤毛のポニーテール姿で、身長は低いが勝気そうな雰囲気だ。

少女は携帯電話を取り出すと、電話をかけた。

「……あ、クロさんですか。つるぎですわ。……例の娘を見つけました。ええ、はい。引き続き監視は継続しますわ。本部に連絡を……え、もうメールを打ってらっしゃいますの？ さすが、速いですわね」

成美の原付が前を通ったので、道の端に身をかわす。

「ええ、わかっています。魔法少女本田つるぎの初仕事ですもの。へまなんかしませんわ」

つるぎと名乗った少女は笑みを浮かべると、携帯電話を閉じた。

#3・あの娘の彼（後書き）

今度は魔法少女ですか。

成美が言ってたラミアが彼女っていう友達は別作品を参照してくださいw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7366q/>

鴨居は低くて結構だ！

2011年8月29日03時39分発行